【随　筆】

2023年は良い年になりますように

住　吉　　尚
（釧路支部）

私にとっての2022年はやはり物価高の影響でしょうか。特にガソリン価格の上昇は私の行動にとって大きな影響を受けました。昨年３月まで12年間書いていた地元新聞のコラムが終わったこともあって、少しずつですが出かけることが減ってきたのが幸いしているかもしれません。それにしてもあらゆるものが値上がりして、生きにくい世の中になってきましたね。こんな中ですが北獣の理事としての仕事では、2022年度の北獣代議員会で会館建設を承認してもらえたことが大きいですね。これで私も気持ち良く理事を降りることができそうです。

さて、2022年４月には人生で２度目となるヒグマとの出会いがありました。とは言え、遠くでチラリと見ただけですがね。やはり近年ヒグマが急激に増えてきているようです。私としてはクマを見に知床に行くのは少し違うかな？、という思いがあります。むしろ札幌出張の折にクマを見たいものです。なんと言っても１月になってもうろうろしていると言うのですから。クマを見ると言えば、私が一番記憶に残っているのは登別クマ牧場で仕事を始めて１年がたった頃だったでしょうか、北大にクマ研ができたと聞いていました。ある日山麓駅の事務所から電話があり、クマ研のメンバーが訪ねて行く！と。ロープウエーで上がってきたのはクマ研の設立者である小川氏でした。彼は私に「大雪山や知床などあちこち探しまわったがクマの顔を見ることができなかったので、ここでクマの顔を見たい！」とのことでした。今では考えられないほど当時はクマが少なかったのです。当時私が年間捕獲数から試算した生息数は約5,000頭です。それからもう半世紀になるでしょうか。これほどクマが増えるとは思いもしませんでした。私がクマ牧場にいた６年間で100例ほどのヒグマの繁殖を見てきました。３歳を超すとほぼすべての雌が妊娠します。子供は２頭が多く、１頭は２割ぐらいでした。でもこれは出産したクマの割合で、妊娠中に調べた経験から言うと、ほぼすべての個体が２頭妊娠していて、１割ほどは３頭の胎児が見られました。これが死産や流産で８割が２頭で、２割が１頭と言う割合いで子育てをするのです。野生個体ではもう少し子供の数が少ないとしても、繁殖適齢個体の1.5倍ほどの子供が毎年生まれてきます。野生個体は飼育下個体より繁殖成績が少し悪いとしても、３～15歳ぐらいのクマの８割ぐらいは妊娠し子育てをするでしょう。クマは10歳を超えると急に体力が衰えてきて、15歳を超える老齢個体では繁殖する個体は急に少なくなります。飼育下では20歳を超す個体もいますが、野生状態ではこんな高齢個体は生きられないでしょう。こんなことを勘案すると、成雄、成雌、子などを合わせ10,000頭ぐらいいると、毎年1,000頭の再生産が可能でしょう。現在の生息数はもう４～５年間の捕獲数を見なければ判りませんが、毎年1,000頭ぐらい捕獲しても簡単には減少に転じないような気がしますので、15,000頭ぐらいはいそうです。もうしばらくはクマ騒ぎが続くと考えた方が良さそうです。

今シーズンは鳥インフルエンザが大発生しています。国内では鳥インフルエンザ発生によりニワトリの殺処分数が1,000万羽を超したと言うニュースは衝撃的でしたね。九州の出水ではナベヅルやマナヅルが100羽単位で死亡しているとか。そしてついに昨年11月にタンチョウでも高病原性鳥インフルエンザウイルスの陽性個体が保護されました。保護したのは音別川の河畔だそうですが、2022年生まれの幼鳥との報道がありました。この幼鳥は年が明けて間もなく死亡したとのこと。そしてその直前なのですが、この個体には足輪が付いていて、「足輪番号から昨年６月に豊頃町内で私が捕まえた個体だ！」との連絡がありました。この個体には兄弟がいて、ヒナ２羽を連れた家族でしたから、残る兄弟の１羽を探し出して、家族の感染状況も見ることができたかもしれないと思うと残念です。「足輪が付いている！」と言う連絡が遅かったので、この家族が今どこにいるのかが分かっていません。11月に保護されて現在は１月ですからもうどうしようもありませんが、遅ればせながら私もこの幼鳥が保護された場所あたりを見に行って来ました。すると川岸の草藪の中に白い塊が。「おや！」写真に撮って拡大して見るとなんとこれはダイサギでした。最近では北海道で越冬するダイサギが多くなり、カウント調査の時に注意が必要になっています。この日はこの近くで足輪付きのタンチョウが２羽見られました。その内の１羽はアルミの足輪の一部が欠けていて、字が読めない状態に見えました。でも現在使われている足輪の一部が欠けたのは確認されていません。初めてのことか？と思いながら帰って、写真をパソコンで拡大して見ると、欠けているのではなく黒く汚れていて、そこに４の字が見えまし

昨年６月の足輪装着現場
この内の１羽が11月に高病原性鳥インフルエンザで死亡しました

河原には別のヒナ連れもいました

音別川河畔で見たダイサギ

（左）足輪の上が欠けているように見えます
（右）足輪は普通はこんな風に見えるのですが

た。どこで何をするとこんなに汚れるのでしょうか？鳥に聞いてみたところです。皆さんの中で普段タンチョウを見ることが少ない所でタンチョウを見たら、ぜひ足輪の有無を見てください。「足輪がある」と言う情報だけでも大きな意味があるのです。

さて昨年はサロベツまでタンチョウの標識放鳥に行きました。その結果、現在までの情報では2021年と22年に足輪を付けた８羽の内、追跡ができた４羽は全部道東へと移動しています。樺太から50 km、西に300 kmも行くとロシア沿海州と言う位置にあるサロベツです。ここのタンチョウがどこから来てどこに行くのか？興味深々で標識調査に参加しました。21年に４羽、22年に４羽に足輪を付けました。発信器は21年には１羽、22年には３羽に付けたのですが、22年に付けた１個は翌日に脱落し、もう１個は２週間ほどして信号が途絶え、21年に付けた１台も春にはサロベツで脱落したので、現在残っているのは１台だけです。21年の１台は鶴居で越冬し、22年の１台は興部からやはり釧路湿原周辺に飛来しそうな感じ。そして装着翌日に脱落した個体は、早々に鶴居に飛来したとか。こうして２年間で８羽に足輪を付けた結果、その半分は鶴居で越冬しましたが、残る４羽は今のところ行方不明です。足輪装着個体の再発見率を考えると、道内で越冬していると考えるのが妥当でしょう。と言うことでサロベツのタンチョウは釧路から分布を広げたもので、格別大陸とつながりが強いと言う訳ではなさそうです。１月下旬から行われる総数調査の際に、現在の不明個体がどこで発見されるか？で更に詳しく判ってくるのでしょう。私がサロベツの帰りに湧別で見た193番と言う個体は春には枝幸町内で観察されていて、10月には十勝で観察されていると言うことを考えると、どうやらタンチョウにとって道東一円はひとつの行動範囲と言うことのようです。これは私が考えていたタンチョウの行動範囲の何倍も大きく、道央に現れているタンチョウも釧路から行ったり来たりしているのでしょう。あの大きな

鳥ですから考えてみれば当たり前と言うことでしょう。

年が明けて皆さんはどうお過ごしでしょうか？私は１月４日に厚岸にワカサギ釣りに出かけてみました。なぜ厚岸か？ですって。あちこち見て歩いたのですが、氷が張っていなかったり、だれも釣り人がいなかったりで、結局厚岸しかやれそうな場所がなかったからです。氷の上は危険もありますから、最近は誰もいない所では氷に上がらないようにしているのです。それでテントが数張あった厚岸に決め、既に張ってあったテントの横で釣りを始めました。ここは昨年数回やったのですが、ただの１匹も釣れなかった所です。案の定、今年も釣れず１時間半で６匹だけでしたが、全てがとても大きく２年以上たった個体です。この界隈で昨年はワカサギが全然釣れなかったので、赤潮騒ぎでワカサギにも大きな打撃があったのでは？、と思っていました。巨大なワカサギが６匹だけと言うのは、昨年の産卵個体が極端に少なく、それ以前に成魚になっていた少数の個体だけが生き残って回遊していると見るべきでしょう。こうなってから個体数が回復するのには何年かかるのでしょうね。

ところで、どこかに出かける時に忘れ物をすることってありますよね。昔JRが国鉄だった頃に全国の列車での忘れ物ランキングみたいな統計を発表していましたね。もちろん傘がトップだったと記憶していますが、比較的多い忘れ物に入れ歯が入っていました。どうして入れ歯を忘れるのか？、私には意味不明でしたが、この歳になってやっと分かるようになりました。私も最近はしばしば入れ歯を忘れて出かけることがあります。入れ歯はどんなに上手に作られていても所詮は口の中では異物にすぎません。あると違和感があり、ないとすっきりするのです。それで忘れやすいのです。しかも私が家を出ると西に行くにも東に行くにも５分ほどで高速道路に乗りますから、ここまで来て気付いても手遅れとなります。こうなると昼はコンビニおにぎりぐらいしか食べられません。昔のJRでは駅弁を食べ、車内の洗面所でうがいをして、と言うのが普通でしたから入れ歯の忘れ物も多かったのでしょうね。また、各駅には名物の駅弁があり、これを食べるのも大きな楽しみでしたよね。汽車が止まるごとに「弁当！弁当！」と売り歩く声がして、これがまた旅愁を掻き立て、実に良いものでした。でも今では釧路から札幌行きの列車には食べ物どころか飲み物も売ってはいません。何とも無味乾燥と言う感じの列車の旅です。

（現代漢詩）

自爆「絶滅危惧種」
陸地生息偏地球
最近出没海宇宙
「愚猿亜種」急増殖

（都都逸）

生きる物
暦あっても
時はなし
継命あって
恐死なし

脳衰大臣　偽憂乳ぢじい（帯広市）

〈句題〉　雪女

「雪女郎 轍（わだち）は深き二本線」
「地吹雪に
踏み跡凸（とつ）と残りけり」
「停止線土産に黒き雪の塊（つち）」

（室蘭市　白波瀬　稔歳）